

テサロニケ人への手紙第一4章13-18節 「キリストの御胸に抱かれる携拳」

1A ご自分のうちに招かれた方

1B 新生

2B 十字架と復活

3B 聖霊の満たし

4B 昇天と再臨

1C 天に引き上げられる私たち

2C 天から共に来る私たち

2A ささまざまな希望

1B 御怒りから救い

2B 栄光の似姿

3B 報いの冠

4B 眠った人々との再会

5B 愛する方に見える日

本文

テサロニケ人への手紙第一 4 章を開いてください。私たちの聖書通読の学びは 3 章まで来ていましたから、今日は午後礼拝で 4 章を一節ずつ見ていきます。今朝は、13-18 節を読みます。「¹³ 眠っている人たちについては、兄弟たち、あなたがたに知らずにおいてほしくありません。あなたがたが、望みのない他の人々のように悲しまないためです。¹⁴ イエスが死んで復活された、と私たちが信じているなら、神はまた同じように、イエスにあって眠った人たちを、イエスとともに連れて来られるはずで¹⁵ 私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。¹⁶ すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、¹⁷ それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることになります。¹⁸ ですから、これらのことばをもって互いに励まし合いなさい。」

今朝は、この箇所をじっくり学ぶのではなく、ここでパウロが書いている、教会にとっての一大出来事、携拳についてお話ししたいと思います。主ご自身が天から下って来られて、その時に、死んだ者も生きている者も空中にまで引き上げられるという出来事です。この出来事だけ聞くと、合理的に考える人は、滑稽に聞こえるかもしれません。また、すでに聖書を信じている人の間では、いつ、この出来事が起こるのか？という激しい議論があります。また、携拳があるのかないのか、という議論もあります。あるいは、携拳についてはほとんど、語られていないという話も聞いています。

1A ご自分のうちに招かれた方

これらのことが、すべて誤りであることをお話したいと思います。そういった神学的な議論も大事な時があるでしょう。けれども、神学的な議論もしくは、全く関心がないという両極端に陥っていないでしょうか？パウロは、13 節で「**あなたがたに知らずにいてほしくありません。**」とっています。パウロが、この表現を使っている時は、必ずと言ってよいほど、教会に知らないままという現状があります。そのような難しい議論の中に埋もれさせて、大勢の人たちを敬遠させるような内容の類ではないのです。パウロが 17 節で言っていますが、「**いつまでも主とともにいることになり**ます」ということなのです。主が共にいる、という、ものすごい大事な真理であり、単純な真理についての事柄が、携挙なのです。キリスト者にとって、最も大事な真理ですね。

イエス様は、弟子たちに対して、とても分かりやすく語られている場面があります。最後の晩餐、つまり、主が捕らえられて、十字架刑に処せられる前日の夜に食事を取られた時に、語られた言葉です。「ヨハ 14:1-3 「あなたがたは心を騒がせてはなりません。神を信じ、またわたしを信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」親しく弟子たちと交わっていたイエス様が、ご自身がこれからいなくなると言われました。十字架につけられよみがえるが、その後天の父のもとに帰られるのですから、弟子たちは独りぼっちになります。しかし、独りぼっちにしないよ、と言われていました。今の私たちもそうですね。主が天に昇られて、神の右に着いておられると信じています。主イエスを信じているけれども、目で見える形で共におられません。しかし、「わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。」と言われていました。また来ます。そして、彼らをご自分のもとに迎えます。主が再び共にいるために、また来てくださるということです。イエス様が、私たちと共にいるようにしてくださるためです。

主はここで、ガリラヤ地方にいるユダヤ人たちだからこそ分かる言葉で語られています。花婿がお嫁さんを迎える時に、自分の父の家に、二人のための部屋を備えます。増築するのです。それから、花嫁のところに行きます。父が号令を出します。「今、行きなさい。」と。そして、角笛を吹いたりして、村中の人々がその行列に加わります。花嫁は、いつ来るか分からない花婿の引き取りを、目を覚まして待っています。そして、来たら、おみこしのような、担いで運ぶ椅子の上に載せられ、花婿の家、父の家に引き取られるのです。これが、「わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。」ということです。

「I コリ 1:9 神は真実です。その神に召されて、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられたのです。」私たちが救われた理由、召された理由は、神の御子、主イエス・キリストとの交わりであります。主キリストに、私たちは結ばれた者となりました。この方が私

たちの内におられ、また私たちもこの方の内にいるようになりました。主イエスは、父なる神と永遠の交わりがあります。「神のふところにおられるひとり子の神(ヨハネ 1:18)」と呼ばれています。この、父と子の交わりの中に、私たちも、神の子どもになる、つまり養子縁組になることによって、招かれています。子が父に対して持っている関係の中に、私たちも招かれたのです。

1B 新生

そこで、主の生涯について思い起こしてみましょう。主は、どのようにしてお生まれになったでしょうか？ 処女マリアがイエスを胎に宿しましたね。御使いガブリエルが宣言しました、「ルカ 1:35 御使いは彼女に答えた。「聖霊があなたの上に臨み、いと高き方の力があなたをおおいます。それゆえ、生まれる子は聖なる者、神の子と呼ばれます。」ヨセフとの夫婦関係ではなく、聖霊によってみごもりました。それゆえ、神の子と呼ばれると言っています。

この方は神の御子であられ、神ご自身です。私たちは神のかたちに造られた人であり、神ではありません。しかしながら、神のかたちに造られた者として、神の御霊によって神の子どもとしていただきました。「ヨハ 1:12-13 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとなる特権をお与えになった。この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。」

2B 十字架と復活

そして主は、およそ 30 歳の時に、公生涯、つまり公の活動を始められました。その最後は、十字架の死とよみがえりです。私たち信じた者は、キリストに結ばれている者として、この方の死といのちにもあずかるようになりました。「ロマ 6:3-5 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。私たちがキリストの死と同じようになって、キリストと一つになっているなら、キリストの復活とも同じようになるからです。」

私たちは、もはや、罪に支配されていた自分に死んでいます。キリストが死なれた時に、この古い人も共に死にました。そしてキリストが葬られた時に、共にその人は葬られました。三日目に主がよみがえられた時に、私たちは共に、新しいいのちを与えられたのです。キリストにあって、新しく造られました。今は、もはや自分が生きておられず、十字架につけられています。今、自分が生きているのは、よみがえられたキリストが信仰によって内に生きておられるからです。

3B 聖霊の満たし

主は、よみがえられてから、ガリラヤで弟子たちに現れてくださいました。それは、ガリラヤでカ

強い、生き活きとした宣教の働きをしておられたように、よみがえられて、再び同じように働いてくださることを証しするためです。そして事実、使徒たちはイエス様と同じようなわざを行いました。使徒の働きにそれが記されています。

主が、そのような働きをされた時に、聖霊に満たされたことを福音書は記しています。イエス様は、バプテスマを受けられて、その時に鳩のようなかたちで聖霊が降って来られました。そして、御霊によって荒野に導かれ、悪魔の試みを受けられました。それから、ガリラヤに行かれます。「ルカ 4:14 イエスは御霊の力を帯びてガリラヤに帰られた。すると、その評判が周辺一帯に広まった。」御霊は、主ご自身を証しする方であり、神ご自身です。この方が主の力強いお働きに共におられました。そして、キリストの弟子たちは同じようにして、聖霊のバプテスマを受ける約束が与えられました。そして力を受けて、力強い働きを聖霊によって行いました。

ですから、御霊による新生においても、キリストの死とよみがえりにあずかるバプテスマにおいても、そしてその後のキリスト者としての証しにおいても、キリストに結ばれた者として、キリストの内にいる者として、この方の生涯に連なっているのです。

4B 昇天と再臨

そして主は、よみがえられた後、ずっと地上におられたでしょうか？いいえ、五十日経ってから、オリーブ山から天に昇られました。そして今、天において神の右の座に留まっておられます。そして、やがて戻って来られ、地上に現れると約束しておられるのです。御使い二人が、イエスが昇られた天を見上げていた弟子たちに、こう言いました。「使 1:11 ガリラヤの人たち、どうして天を見上げて立っているのですか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行くのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになります。」

これまで私たちは、キリストに結ばれているので、キリストのご生涯に私たちに連なっていることを見ました。したがって、こういうことができます。「キリストが天に昇られたように、私たちも天に引き上げられ、キリストがしばらく天に留まっておられるように、私たちも天に留まり、キリストが地上に再び来られて現れるように、私たちも神の栄光を帯びて、共にこの世に現れる。」ということです。キリストが聖霊によって地上に来られて、聖霊の力で生涯を歩まれ、十字架で死なれよみがえられたことが、私たちの身にも現れたように、私たちは天にキリストにあつて引き上げられ、そしてキリスト共に地上に戻ってくるのです。

携挙は、大きな出来事ではない、携挙はないであるとかいう意見が、キリスト教の中にありますが、主が天に昇られたのに、どうしてそれにあずかることができないと考えるのが不思議です。主が天に昇られたように、私たちも引き上げられ、天に主と共にいて、それで主が戻って来られるように、私たちも主と共に戻ってくるのです。こうして神の国を相続します。

1C 天に引き上げられる私たち

主は天に昇られて、神の右の座に着かれました。それは、サタンと諸々の悪の勢力が、キリストの死とよみがえりのわざによって敗北し、囚われの身になったことを意味します。あとは、主が立ち上がられて、この世界をご自分のものとして戻って来られるだけです。ご自身がその御座に着かれた時に、天に引き上げられた聖徒たちは、その勝利を喜び歌っています。黙示録 5 章には、その歌を見ることができます。天上における歌です。「5:9-10 あなたは、巻物を受け取り、封印を解くのにふさわしい方です。あなたは屠られて、すべての部族、言語、民族、国民の中から、あなたの血によって人々を神のために贖い、私たちの神のために、彼らを王国とし、祭司とされました。彼らは地を治めるのです。」

そして、主が夫として、教会が妻としての婚姻が天において執り行われます。「19:6-8 また私は、大群衆の声のような、大水のとどろきのような、激しい雷鳴のようなものがこう言うのを聞いた。「ハレルヤ。私たちの神である主、全能者が王となられた。私たちは喜び楽しみ、神をほめたたえよう。子羊の婚礼の時が来て、花嫁は用意ができたのだから。花嫁は、輝きよい亜麻布をまとことが許された。その亜麻布とは、聖徒たちの正しい行いである。」

2C 天から共に来る私たち

そして主が、地上に戻って来られます。最後のあがきを行っている、獣、すなわちサタンから力を与えられた反キリストを滅ぼすために来られます。その時に、栄光の姿をもって、神の子どもとしてキリストと共に私たちは現れます。「コロ 3:4 あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」そして、主が来られると、天地がエデンの園のように、神のみこころの姿に回復します。ちょうどアダムが地を従えていた時のように、被造物が、神の子らの現れを待っているのです。「ロマ 8:20 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。」

2A さまざまな希望

このように、主に結ばれた者として、主のお働きにあずかる者たちとさせていただきます。次に見ていきたいのは、私たちキリスト者は、救われた者たちだということです。そして、救いというのが、携拳によって成り立っているということです。キリスト者たちが、「私は、いついつ救われました。」という言葉を使いますが、携拳については、どうでもいいと考えている人々がいることに驚きます。私たちは、テサロニケ人への手紙の前にも、パウロの手紙を読んできましたが、そこに何度となく、主が来られることによって救いが完成することを、彼は教えてきました。

1B 御怒りから救い

私たちはまず、神の御怒りから救われています。「1:10 御子が天から来られるのを待ち望むようになったかを、知らせているのです。この御子こそ、神が死者の中からよみがえらせた方、やが

て来る御怒りから私たちを救い出してください。」神は、人々の罪に対して報われます。神の怒りというのは、正しい裁き主として裁かれる時の怒りです。ちょうど裁判官が、判決を下す時のような、正義にある怒りです。私たちが救われたという時に、罪からの救いを意味しています。そして、その罪に対する神の正しい裁き、御怒りからの救いを意味します。パウロは、こう書きました。「ロマ 5:9-10 ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させていただいたのなら、和解させていただいた私たちが、御子のいのちによって救われるのは、なおいっそう確かなことです。」

終わりの日に、主は罪と不正に満ちたこの地に、御怒りを注がれる日を定めておられます。このことについては、テサロニケ第一 5 章、次週にじっくり見ていきたいと思います。地上に御怒りを下されるのです。永遠の火の池に投げ落とされるのも、御怒りの現れですが、その前に地上においても怒りを現わされるのです。

しかし、主はその中からご自身を信じる者たちを救われました。かつて不正が地上にはびこった時、神が大洪水によって、地上で生きているものを消し去られました。ノアとその家族だけが箱舟によって救われました。そして、ロトの町に対する裁きもありました。ロトの住民が忌まわしいことを行って、それゆえ主が天から火をふらせました。しかし、その前にロトをそこから逃げるようにして、それから火を降らせました。ノアにしても、ロトにしても、そこから彼らを取り去られることによって、救われたのです。キリスト者たちも、天に引き上げられることによって、地上に下す御怒りから救うようにしていただきます。(ルカ 17:26-30 参照)

2B 栄光の似姿

そして、私たちが救われているというのは、罪に対する御怒りから救われるという消極的側面だけでなく、私たち自身が、主の御姿に変えられるという積極面があります。神にかたちに人は造られました。神に似せて造られました。アダムが罪を犯したので、その罪によって神のかたちが損なわれました。神のかたちそのものであられるキリストが来られたことによって、キリストにあって私たちに、神に似せて形造られています。そして、それを完成させるのが復活であり、栄光の姿に変えることです。アダムによって罪を受け継いでいるこの体が、天において用意された、新しい体にとって替えられます。

そして、その救いの完成が、主が天から戻って来られる時に起こるのです。「3:20-21 しかし、私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。キリストは、万物をご自分に従わせることさえできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」

3B 報いの冠

そして、私たちは主から、信仰の歩みをしてきたことに対する報いを受けます。「I テサ 2:19 私たちの主イエスが再び来られるとき、御前で私たちの望み、喜び、誇りの冠となるのは、いったいだれでしょうか。あなたがたではありませんか。」上から来る賞を、主から受け取ります。主が来られる時にそれをしてくださいます。

イエス様が、山上の垂訓でお語りになったことを思い出してください。善行を人に見られるために行ってはいけない、隠れて行いなさい、と言われました。それは、天の父が見て、報いてくださるからだということです。「マタ 6:4 あなたの施しが、隠れたところにあるようにするためです。そうすれば、隠れたところで見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。」

主が戻って来られて、それで私たちに報いを与えられるということが分かっているからこそ、この方のみを恐れ、人々にへつらわない動機となります。人相手の信仰生活ではなく、神相手の信仰生活です。主が主人であり、私たちはしもべです。携拳の後に、キリストの裁きの座が現れることを知っているからこそ、私たちは、主を恐れかしこみつつ、この方に仕えることができるのです。人々から見返りがなくとも、忍耐して、労苦のともなう奉仕をすることができる力となるのです。

4B 眠った人々との再会

そして、携拳は、私たちの愛する人たちとの死別に対して、慰めを与えます。それが、冒頭で読んだ、本文です。テサロニケの人々が、眠っている人々、つまりキリストにあって死んで行った人々が、主が来られるのにあずかることができないと思って、悲しんでいました。しかし、パウロは、すでに死んだ人々がまず、よみがえり、そして生き残っている私たちが引き上げられて、それで共に主に会うのだと教えています。そのことばをもって、励まし合いなさいと言っています。

私たちの友人に、4歳の時に心筋症で天に召された息子さんを持つ夫婦がいます。その葬式、追悼式のビデオ、そして式辞の紙と共に我が家に送られてきました。そこに、テサロニケ第一 4章 16-17節のことばが印刷されていたのです。「¹⁶ すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラッパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、¹⁷ それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。」この子が、再び健康な体を持って、決して朽ちることのない、復活のからだをもって、自分たちに会ってくれる。それが、主が天から下って来られる時なのだ、ということです。

5B 愛する方に見える日

最後に、携拳というのは、自分の愛している方に再び会う日です。自分を救ってくださった方、いのちを与えてくださった方を愛していませんか？その方に会いたいと思いませんか？顔と顔を合

せて会いたいと思いませんか？こんなシンプルな願いなんですね、携挙の希望というのは！聖書の最後、黙示録の最後にこんな言葉があります。「22:17 御霊と花嫁が言う。「来てください。」」
「22:20 これらのことを証しする方が言われる。「しかり、わたしはすぐに来る。」アーメン。主イエスよ、来てください。」この愛の表明を、邪魔する者たちがいます。そうした存在を、愛している人は、ほんと煙たいですよ。ハエのように、打ち払いたい。だから、パウロが言ったのです。「1コリ16:22 主を愛さない者はみな、のろわれよ。主よ、来てください。」